

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	冠詞研究 : ロレンスの作品中における人名を中心として <卒業論文要旨>
Author(s)	下井, 翠
Citation	広大言語 , 10 : 28 - 31
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046346
Right	
Relation	



Bibliographie Sommaire ;

Traité de Versification Française par W. T. Elwert.

Versification Française par Jean Suberville

Paul Eluard par Jouis Parrot

フランス詩法上下	鈴木信太郎	著
フランス文学史	小松清	編
	杉捷捷夫	
現代フランス文学	山田九郎	訳
シュールレアリスム	稲田三吉	訳
言語にとって美とは何か I, II	吉本隆明	著
文芸論	九鬼周造	著
無からの抗争	萩原朔太郎	著

冠詞研究

(ロレンスの作品中における人名を中心として)

下井 翠

日本人にとっては、冠詞の問題は馴みにくく、英語学習に当りこの問題に随分悩まされてきた。そこで、この面倒な問題に何か理論的説明を与えるべく、「冠詞」をテーマにし、「固有名詞(人名)と冠詞について」という小テーマを選定した。

まず序論では、冠詞についてその定義、発生、歴史、従来の研究を概説し、本研究について、固有名詞と冠詞の関係にふれ、固有名詞は原則として無冠詞であるが、習慣その他の理由により冠詞をつけることを、Christophersenの言を引用し示した。研究方法はD. H. Lawren-
ce の「息子と恋人」と「チャタレイ夫人の恋人」を選んで、その中の人名を全てカードに書取り、その中から冠詞その他の付属語が付いたものだけを抜き取り、次の様に分類して、系統立てて整理し、且つ理論的説明を与えるよう努めた。

1. 定冠詞が付いたもの
2. 不定冠詞が付いたもの
3. 無冠詞のもの

本論は、上述の三つの場合にさらに追加すべき用法を加え、さらに細く次の様に分類して、例を一文ずつあげ、一般的に説明した。

第一章 通常定冠詞が用いられる場合

1. 家族名をあらわす場合
2. 普通名詞が人名と共にある場合

第二章 通常不定冠詞が用いられる場合

1. 家族の一員をあらわす場合
2. “A certain”の意をあらわす場合
3. “Another, a person like”の意をあらわす場合

第三章 通常無冠詞が用いられる場合

1. 称号・敬称・職業・血族関係等を示す名称が人名につく場合
2. 人名に代名詞がつく場合
 - (1) 人称代名詞がつく場合
 - (2) 指示代名詞がつく場合
 - (3) 不定代名詞が付く場合

第四章 その他の注意すべき用法

1. 人名に形容詞が付く場合
2. 人名が形容詞的機能を持つ場合
3. 人名が作品をあらわす場合

※ 説明し難いもの

その用法に最も適切である用例を1例ずつあげたが、必要に応じては数例を、又「人名に形容詞がつく場合」については、同じものは除いて、全ての用例を示した。なお用例には日本語訳をつけた。

結論、本研究のテーマは、冠詞の用法の最大の例外であり、ねらいはこの例外を出来るだけ系統立てて整理し、且つ理論的説明を与えることにあるのであって、それらを一般法則にまで持ってい

くのは目的としていない。又それは、この研究がロレンスの作品中の人名についての冠詞研究なので、困難である。ただ傾向として、人名に限定的な附加語が付いた場合には定冠詞が付き、非限定的な附加語の場合には無冠詞であり、人名が普通名詞の性格を帯びた場合には、附加語の有無にかかわらず、不定冠詞がついたり或は複数形になったりすると言えよう。しかし、本研究で取扱ったものはあらさがしとも言えるものであり、やはり人名は、わずかの例外を除いては、無冠詞である。

参 考 文 献

1. Biard, A. : L'article "the" et les caractéristiques différentielles de son emploi. Bordeaux. 1908
厨川文夫訳「定冠詞論」英語学ライブラリー (8)
2. Christoffersen, P. : The Articles. A Study of Their Theory and Use in English. Copenhagen. 1939
3. 一色マサ子訳述「冠詞」英語学ライブラリー (29)
4. 広瀬泰三「名詞」英文法シリーズ (3)
5. 一色マサ子「冠詞」英文法シリーズ (9)
6. 井上義昌 : A Comprehensive Dictionary of English Grammar. 以上 研究社.
「英文法辞典」 開拓社.
7. 岩崎健弥「新しい冠詞の見方と使い方」 研究社.
8. Jespersen, O. : A Modern English Grammar. VII Copenhagen. 1949
9. 金口儀明「名詞・代名詞」現代英文法講座 (1)
10. 小稻義男「冠詞・形容詞・副詞」現代英文法
11. 大塚高信 : Dictionary of English Grammar. 「新英文法辞典」三省堂
12. Portsma, H. : A Grammar of Late Modern English II Groningen. 1914
13. Sweet, H. : A New English Grammar II Oxford. 1924

14. 田中 菊雄 : The Complete English Grammar.
「英語広文典」 白水社.
15. Vaccari, O. : English Articles and Relative pronouns
「英文法詳論」 丸善.
(文責 池田)

「雪国」とその英訳 "Snow Country"

香 川 ミチ子

日本人と欧米人とは、その文化的・風土的・精神的な背景において、国民性を異にする。それは言語においても現われ、日本語特有な表現と、英語特有なそれも、またあるに違いない。ここでは、川端康成作「雪国」と、その英訳 E. Seidensticker "Snow Country" を取り上げ、原文の持つ、詩的・感覚的 雰意気を 漂わせる、日本語特有な美しさが、英訳では、どのように表現されているのか、考えてみたい。

文体ということについては、様々な定義・解釈があるが、ここでは、それを文章における様式とする。様式とは、同一作家の芸術形態を異にする諸作品において、それらに共通した、表現特徴の群れから成立するところの形象である。従って、「雪国」における“文体”とは、単語の使い方や、文章の書き方の、その著しい傾向と考えたい。

論理的な科学論文の場合には、ともかく、「雪国」のような情緒豊かな文章の翻訳には、お互いに異質な背景を持つ、日本語と英語の、その文体的特性における、越え難い壁があるが、ここでは、そのことを念頭において、どの程度まで、原文の文体的特性を生かした英語が可能なのかという立場で論を進めざるを得ない。

本 論

一章 「雪国」の文体研究

- I. 名 詞 (1)胸 (2)底
- II. 副 詞
- III. 自然描写
- IV. 人物描写 (1)駒子 (2)葉子 (3)島村